

幕屋(栄光と美を表す聖なる装束 I)

これまで、幕屋の内側から外側まで、すなわち至聖所の契約の箱から幕屋の庭に至るまで、見てきた。この項目で、私たちは、どのようにして礼拝者として神のみもとに行くべきかを考える。ここまでの個所で、聖所にある金の香壇や幕屋の庭にある青銅の洗盤についての記述はまだない。これは、忘れたわけでも、誤ったわけでもない。青銅の洗盤は神の民の礼拝、金の香壇はとりなしを象徴している。大祭司が信者のためにとりなしの務めの場所に行くまでは、礼拝もとりなしもなしえないからである。

祭司の選抜

「あなたは、イスラエル人の中から、あなたの兄弟アロンとその子、すなわち、アロンとその子のナダブとアビフ、エルアザルとイタマルを、あなたのそばに近づけ、祭司としてわたしに仕えさせよ。」(出エジプト 28:1)

神は、アロンとその子孫を祭司職に選ばれた。

栄光と美を表す聖なる装束

「また、あなたの兄弟アロンのために、栄光と美を表わす聖なる装束を作れ。あなたは、わたしが知恵の霊を満たした、心に知恵のある者たちに告げて、彼らにアロンの装束を作らせなければならない。彼を聖別し、わたしのために祭司の務めをさせるためである。彼らが作らなければならない装束は次のとおりである。胸当て、エポデ、青服、市松模様の長服、かぶり物、飾り帯。彼らは、あなたの兄弟アロンとその子らに、わたしのために祭司の務めをさせるため、この聖なる装束を作らなければならない。それで彼らは、金色や、青色、紫色、緋色の撚り糸、それに亜麻布を受け取らなければならない。」(出エジプト 28:2-5, 39:1)

大祭司アロンは、キリストの型であった。アロンが身につける装束は、「栄光と美を表わす聖なる装束」(28:2)と書かれている。この装束は、「神が知恵の霊を満たした、心に知恵のある者たち」(28:3)に作らせるように命じられている。それは、「神のために祭司の務めをさせるため」(28:3,4)であった。出エジプト 35:30-36:1によると、ユダ部族のベツアルエルとダン部族のオホリアブがそのために召されている。また出エジプト 38:21-31には、実際になされた奉仕が書かれている。大祭司の装束は、胸当て、エポデ、青服、市松模様の長服、かぶり物、飾り帯(28:4)、『主への聖なるもの』と刻んだ純金の板(28:36)、亜麻布のももひき(28:42)である。祭司の装束は、長服、飾り帯、栄光と美を表すターバン(28:40)、亜麻布のももひき(28:42)である。これらは、すべて、神がデザインされ、心に知恵のある者に作らせた。装束の材料となるのは、「金色や、青色、紫色、緋色の撚り糸、それに亜麻布」(28:5)であった。垂れ幕や庭の入口の幕に使われた色に加えて、金色が最初に述べられている。金は、神の義の栄光を表す。キリストは、私たちの偉大な義なる大祭司である。青は天の色。紫は強大な支配力をもった人の子として王の王、主の主、世界の真の王としてのイエスの栄光。緋は、罪(うじ)となられ、ご自分の民のメシヤとして栄光を受けられた、王イエス。亜麻布は、聖さを表す。

エポデ

「彼らに金色や、青色、紫色、緋色の撚り糸、それに撚り糸で織った亜麻布を用い、巧みなわざでエポデを作らせる。これにつける二つの肩当てがあつて、その両端に、それぞれつけられなければならない。エポデの上に結ぶあや織りの帯は、エポデと同じように、同じ材料、すなわち金色や、青色、紫色、緋色の撚り糸、それに撚り糸で織った亜麻布で作る。二つのしまめのうを取ったなら、その上にイスラエルの子らの名を刻む。その六つの名を一つの石に、残りの六つの名をもう一つの石に、生まれた順に刻む。印を彫る宝石細工師の細工で、イスラエルの子らの名を、その二つの石に彫り、それぞれを金のわくにはめ込まなければならない。その二つの石をイスラエルの子らの記念

の石としてエポデの肩当てにつける。アロンは主の前で、彼らの名を両肩に負い、記念とする。あなたは金のわくを作り、また、二つの純金の鎖を作り、これを編んで、撚ったひもとし、この撚った鎖を、先のわくに、取りつけなければならない。」(出エジプト 28:6-14, 39:2-7)

エポデということばは、「着る」を意味するヘブル語である。「金の板を打ち延ばし、巧みなわざで青色、紫色、緋色の撚り糸に撚り込み、亜麻布に織り込むために、これを切って糸とした」(出エジプト 39:3) 金糸が撚り込まれていた。エポデの両端には、二つの肩当てがつけられた。

エポデは、エポデと同じ材料で作られたあや織りの帯で留められた。「帯」は大祭司のエポデと関連のあるときのみに使われていることばであり、「工夫したわざ」を意味している。帯は奉仕を象徴している。

イエスは過越の夕食後、「夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまどわれた。それから、たらいに水を入れ、弟子たちの足を洗って、腰にまどっておられる手ぬぐいで、ふき始められた。」(ヨハネ 13:4,5)

「帰って来た主人に、目をさましているところを見られるしもべたちは幸いです。まことに、あなたがたに告げます。主人のほうで帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばにいて給仕をしてくれます。」(ルカ 12:37)

救い主、王の王、主の主であられるのに、私たちに仕えてくださるへりくだり。「帯」は主イエスがご自身の民に仕えてくださることを象徴。

エポデの肩当て

肩当てには、二つのしまめのうが、金のわくにはめられ、それぞれの肩の一つずつつけられた。それぞれのしまめのうには、12人のイスラエルの子らの名前(12部族の名前)が、生まれた順に6人ずつ刻まれた。こうして大祭司は、主の前でその両肩にイスラエルの子たちの名を負って、記念としなければならなかった。肩は力を示す。

「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩(単数)にあり、…」(イザヤ 9:6)

良い羊飼いが、失われた一匹の羊を見つけると、「喜んでそれを自分の肩(複数)に乗せ、」(ルカ 15:5<口語>)よみがえりの力によって、主はご自分の民ひとりひとりを、その両肩に担ってくださる。

それぞれの石は金のわくにはめられ、さらに、二つの純金の鎖を編んで作った撚ったひもを金のわくに取りつけた。イエスを信じる信仰で義とされた者は、神によって義の衣を着せられる。二つの純金の鎖、二つの義とは、人に対する義、神に対する義ということだろうか。

